佐世保繁昌記

完

特 72
33

自序

余頃日事を帶ひて佐世保に來り。現今の事を目擊し。其進歩の急速なるに驚けり矣。世佐世保の繁昌を聞き。轉た羨念の情に禁へず。或は事業を創營せんと欲して遊ひ。往來の馬車は日に幾千の士女を送り。出入の船舶は月に數萬の荷客を輸す。今の時に方り余か繪入自由新聞社に在るの日。通俗繪入東京開化繁昌記を著述出版し。以て都門の盛況を紹介せし例に倣ひ。羈窓數日の征暇を偸み。匆匆筆を執つて此書を作す。若し其れ事業家を利し。遊覽者に便

或は事業を創營せんと欲して遊ひ。往來の馬車は日に幾千の士女を送り。出入の船舶は月に數萬の荷客を輸す。今の時に方り余か繪入自由新聞社に在るの日。通俗繪入東京開化繁昌記を著述出版し。以て都門の盛況を紹介せし例に倣ひ。羈窓數日の征暇を偸み。匆匆筆を執つて此書を作す。若し其れ事業家を利し。遊覽者に便

する所あらは幸甚。

明治廿九年春日

六無散史

佐世保繁昌記

六無散史著

總體記

佐世保は鎮守府の在る所にして、長崎縣東彼杵郡の西端に位し、東南は日宇村大字白南風に接し、西は北松浦郡山口村に交はり、東は抽ノ木村に界し、西南は港灣に向ひ、九町八部より成立てり、町人は商工を以て榮へ、部民は農漁を以て富む、此地素、寂寞たる一寒村落なりしが、明治十九年鎮守の創設ありしより、漸を逐ふて戸口を增加し、稍一小市街を形くるに至り、征清の役以來、急激なる變遷を現はし、一日にして數戸を增加し、明治二十八年十二月三十日現在の戸數、四千百九、人口壹萬六千九百九十五の多きに達す、然れども是れ、政廳公簿に上る所の數耳、夫の建築中に係る家屋、及ひ文武官員其家族、宿泊旅人、勞働役夫等を合算すれは、

其數幾萬なるを知る可からす、由て以て佐世保の繁昌を推測するに足らむ歟、

神社

佐世保港の事物、悉く新創に屬す、故に神社の如きも、宏壯華麗、人目を驚かすに足るもの莫しと雖も、祭祀時に盛んにして、參詣常に絶へさるものを擧くれは、八幡街に八幡神社あり、天滿街に天滿宮あり、第一公園に祐德稻荷神社あり、琴平坊に琴平神社あり、名切丘に宮地嶽神社支社あり、其他小祠に至つては枚擧に遑あらさるなり、

佛閣

眞宗敎法寺は本街に在り、禪宗西方寺は八幡街に在り、俱に港内無比の巨刹にして、自ら莊嚴を極む、日蓮宗敎會所は部久手に在り、淨土宗敎會所は濱田街東公園の下に在り、賽者日夜絶へすと

云ふ、

基督敎會堂

日本基督敎會堂は濱田街谷鄕に在り、傳道師は吉武五右衞門氏なり、

官衙公署

鎭守府の建築は廣袤里餘の範圍に涉りて、起伏連續の狀、恰も崔嵬たる山岳と雌雄を爭ふものゝ如く、其壯觀自ら言ふ可からさるの趣あり、鎭府の外、官衙、公署の港内に在るもの總へて七、佐世保村役場、佐世保村會議場は、天滿街西公園の下に在り、大村警察署佐世保分署は天滿街に在り、長崎憲兵首部佐世保屯所は佐世保橋西詰に在り、郵便電信局は本街に在り、大村區裁所佐世保出張所、公證人杉野役場は上坊に在り、何れも簡小の規摸、質素の造作、其趣自ら奥床し、

學校

全港の學齡兒童は、男千四百二十八名、女千百五十一名、合計二千五百七十九名、就學兒童は男八百四十一名、女四百六十二名、合計千三百三名にして、此等の兒童を敎育せん爲に設けられたる學校を、佐世保尋常小學校、佐世保高等小學校の二とす、俱に八幡街に在り、校舍の廣大、敎場の多數、蓋し地方稀有の建築たり、高等小學の生徒は男百六十五名、女五十三名合計二百十八名、尋常小學の生徒は男五百五十八名、女三百三十一名、合計八百八十九名にして、高等小學の敎員は六名、尋常小學の敎員は十五名なり、嗚呼末來の良相を造るの模型は、現在の小學なり、將來の賢母を作るの規矩は、方今の小學なり、小學の位地最も高く、敎員の責任極めて重し、誰か小學の隆盛を努めざる、

私塾

私塾の谷鄕に在るもの、之を佐世保學舍と稱し、塾主中尾庄太郎氏、自ら敎授の任に當り、英學、漢學、算術等、各生徒の望に任し、晝夜を問はず、修學せしむ、彼の街上にイみ、呆然として糶賣場の傍觀に時を費すの閑人、花街に走り、恍乎として妓焉の素見に更を重ぬるの懶夫、花牌に宵を徹する轉婆娘、冗談に光を消すの箱入姫、佐世保學舍に入りては如何、

公園

此地公園と稱する天然の高丘二あり、一を第一公園、又は西公園と名つけ、一を第二公園、又は東公園と稱す、俱に眺望の佳妙全港第一たり、公園の地たる、市街より挺つること十有餘仞、遠く眺めは、峯巒蠖々霞を罩め、灣水漾々碧を泛へ、漁船の出入、帆舟の進退、之を掌に指すが如し、近く望めは、整然たる市街双眸に落ち、徒歩の老幼、車馬の男女、呼へは答ふるものに似たり、春は花を弄ふに

宜しく、夏は涼を納るゝに宜しく、秋は月を賞するに宜しく、冬は雪を觀るに宜し、散史一日此園に遊ひ、匆匆二十八字を綴りて曰ふ、山明水靜物亦閑、千艦萬舟指呼間、滿目風光總似畫、超然占得別仙寰、彼の有名なる割烹翠濤園は西公園の中に在り、建築總へて素材を用ひ、虛飾を捨て風雅を取り、芳醇泉の如く、蕙肴丘に似たり、天女召に應して立ろに現はれ、絃歌令に隨ひ忽ち涌く、眞に是れ塵外の仙鄉なり、風流才士須く一遊すへきの所たり、

景勝

眼鏡巖は左石に在り、奇跡を以て其稱四方に知られ、福石の觀音は福石に在り、眺望を以て其名遠近に高く、蛭子岬は島地に在り、風色を以て其聲都鄙に響く、全岬の土地悉く豪農田代貞二郎氏の所有に係り、岬角高き處に稻荷を祀り、岬脚坦なる處に大藤、片山、黑田等の酒樓、茶亭相連り、勞を慰するの賈人行き、問を遺るの

才士臨み、庭上常に履を絕たす、之を佐港の三景と稱す、其他饅頭島は島山に對し自ら雌雄の觀を爲し、小佐世保の妙現穴は、古人穴居の跡を遺し、景勝を以て稱す可きもの一々屈指に遑あらす、佐港の全境寧ろ天然の一大公園と稱す可き耳、

天滿街

天滿街は港內の樞區にして、士女の往來絡繹として織るか如く、車馬の馳驅駸々として飛ふに似たり、人語喧々、車聲轔々、肩摩轂擊熱鬧を極む、旅館には油屋あり、舶來雜貨店には新免商店、大島共產商會、大島商店、人形屋あり、吳服太物商には山本商店、永見、新居商店あり、酒舖には窓の梅、井手、丸善、高椋あり、時計商店には岡、山口、中野あり、紙店には平川あり、度量衡販賣商には岩永あり、陶器商には田中あり、硝子器械、畳表商には辻商店あり、菓子商店には吉富あり、造船器械商には朝日商社出張所あり、割烹亭には江

戸惣樓、伊呂波樓、千年亭あり、名醫吉田、七種、川崎等の館邸亦此間に在り、其繁昌は以て東京銀坐街に比す可し、

本街

本街は佐世保川の西岸に沿ひ幸行、佐世保の兩橋間に渉る數丁の街區を稱せる名にして、魏々たる傑閣は峨々たる層樓に對し、酒舗は菓子店に隣し、古着店は呉服店に接し、魚屋は乾物屋に連り、米舗は炭團屋に續き、千商此に集ひ、百貨此に湊り、往來の軍人は絶ゆる時無く、奔走の衆庶は斷る節無し、酒舗には小林、富田、濱崎あり、古物商には川尻、濱崎あり、藥舗には小笠原あり、金物商には尾崎あり、鑛業家には瀬尾あり、會社には合名會社大倉組佐世保出張所、眞宗信徒生命保險株式會社代理店、明治生命保險株式會社代理店、明治火災保險株式會社代理店、仁壽生命保險株式會社代理店あり、銀行には早岐銀行支店あり、其繁昌は以て東京日

本橋區に喩ふ可し、

濱田街

濱田街は南北に貫通せる國道線數丁を幹とし、東西に分岐せる各坊を枝とし、西方一帶佐世保川に面せる片坊を合したる總稱にして、其未だ本街第何坊、濱田街第何坊と分稱せざるは、公私の不便鮮しとせざれども、其地域の廣濶なる、他街に倍し、戸數亦之に稱ふ、往還の人馬は前後相接し、出入の輕舫は首尾相銜み、幾輛の荷車隊を爲して土石を運ふは、以て土工の盛なるを示し、數百の工丁列を作して木材を搬ふは、以て建築の昌なるを觀す、古物商には副島あり、金物商には齊藤あり、藥舗には荒木分店あり、醬油商には岩永、松尾あり、雜貨商には小田あり、洋酒罐詰には瓊陽合資會社あり、兩替店には平山あり、材木商には松永、喜々津、森、古賀、兒玉、小池あり、陶器商には口石あり、裁縫店には成富あり、荷受

問屋には江代あり、造船器械商には栃並商會あり、酒舗には川原田、染川、瀬頭、中島、平山あり、廻漕店には鶴谷、岩永、福島、丸屋、靜廼舍、富村屋、三輪屋あり、魚市場には木下あり、鑛業には松尾、田崎、松永、松田あり、請負家には廣瀬、大串、山田、藤永、古賀あり、割烹店には青柳、豐藤あり、輕便料理には末廣あり、會席料理には武藏屋あり、牛島商行は名切に在り、會社には三井組出張所あり、松浦家事務所は國道通に在り、全街の盛況は以て東京淺草區に擬す可し、

八幡街

天滿街以北、宮田街以南、を八幡街と稱す、百貨輻湊し、人馬雜踏す、呉服太物商には谷口あり、雜貨商には松田あり、藥舗質店には太田あり、書林には五郎川あり、旅館には清水、泉屋、高橋あり、勸商場の大廈は渡邊醫院の高宇に對し、畫壁相映し、龍甍相連り、繁昌の景況、天滿、濱田の兩街に亞く、

本島街

本島街は島瀬橋以南、白南風以北、數丁間に跨る街名にして、全街殆ど割烹、飲食、旅舍を以て塡めらる、試に割烹の招牌を閲みすれは、曰く糸屋、曰く桝屋、曰く明治樓、曰く志新亭、曰く肥前屋、曰く大和屋、曰く鹿島屋、曰く岩井屋、曰く吉田屋、曰く若松屋、曰く松月樓、曰く一心亭、曰く色氣有樓、其數枚擧に遑あらずと雖も、天保樓、地獄亭、曖昧軒、喧嘩屋、等の招牌を掲ぐるも、亦遠きにあらざる可し、酌婦數名、常に店頭に團欒し、或は往來の浪客を呼び、或は洋裝の勇士を擁し、或は三絃を嚙じり、或は太鼓を叩き、或は人無きに語り、或は醉はざるに躍り、拾錢銀貨に躓ひて轉び、五錢白銅に眩んで倒れ、瓶子を枕にして寐ね、毛布を彼つて眠り、奇狀妙態、人をして抱腹絶倒せしむるや否やは、散史の知る所にあらず、本島街も亦、佐世保繁昌の花を宿せる一枝として觀る可き歟、

銀行

銀行の實業社會に於ける、恰も兵站部の戰爭場裡に於けるが如く、韓信を以て自ら許す百名商ありと雖も、蕭何を以て自ら任ずる一銀行の在る無んは、攻守進退自由ならず、是れ則ち實業の發達と供に、銀行の隆盛を見る所以なり、佐世保港に銀行二あり、第十八國立銀行佐世保出張所、早岐銀行佐世保支店、卽ち是なり、第十八國立銀行佐世保出張所は、鎭守府の中に在り、所長は菅富二郎氏なり、日清開戰以來該出張所が取扱せし國庫金は其額殆と八百萬圓に上下すと聞く、佐世保港をして今日の繁昌を來さしむるもの抑も故ありと謂ふ可し、早岐銀行佐世保支店は本街に在り、店長は小林松次郎氏支配人は村尾美二氏なり、早岐銀行の資本總額は六萬圓なりしが、行運の發達するに隨ひ、資本の增加を要するに至り、今般株主總會の決議を以て、更に四萬圓を增株

し、總計金拾萬圓と爲し、以て實業社會の便利を謀んとし、主務大臣に向つて稟請中なりと云ふ、是皆佐世保港繁昌の結果なりと謂ふ可し、

會社

社會の進運は事業の壯大を招き、事業の壯大は資本の多額を要し、資本の多額は數人の結社を待つ、是れ則ち會社の設立ある所以なり、會社の港內に在るもの總べて十一、就中世の信用を得て社運益盛なるものを擧ぐれば、曰く大倉組出張所、曰く三井組出張所曰く朝日商社出張所、曰く瓊陽合資會社、曰く明治生命保險株式會社代理店、曰く明治火災保險株式會社代理店、曰く眞宗信徒生命保險株式會社代理店、曰く仁壽生命保險株式合資會社代理店、卽ち是なり、大倉組を別つて二と爲す、一を合名會社大倉組佐世保出張所と稱し、中橋西詰に在り、所長は前田貞四郎氏にし

て、專ら鎭府の用達を務む、一を大倉土木組出張事務所と稱し、鎭守府内に在り、所長は高石忠慥氏なり、專ら鎭府の土木を請負ふ、大倉組の名聲は天下に遍し、今更散史が贅筆を須すして、其隆盛は人自ら之を知らむ、瓊陽合資會社は濱田街國道筋に在り、洋酒、罐詰、煙草、呉服太物類を販賣す、社長は古泉久太郎氏、主幹は久米宗一氏にして、公私遠近の別無く、汎く花客の信用を博し、社運亦隆盛を極む、朝日商社出張所は天滿街に在り、主幹は池谷昌三氏にして、專ら造船器械類を販賣す、資豐に信用厚く、行運頗る旺盛なり、三井組出張所は濱田街川端筋に在り、所長は齊藤松司氏にして、專ら舶來諸品の用達を務め、徒に小營に拘々たらず、是れ則ち三井家の商法として、群賈に超ゆる所以なる乎、

新聞紙

文明的思想の冷熱を知らんと欲せば、先つ其地新聞雜誌購讀者の多少を知るを要す、佐世保未だ新聞雜誌を刊行せず、故に之が供給皆他方に仰がざるを得ず、其新聞雜誌を販賣配達する商舗の港内に在るもの二、曰く本街川尻商店、曰く濱田街佐々木商店卽ち是なり、川尻商店は主人川尻正勝氏が、青年社會に勢力を有し、交際場裏に名望を博せるに由り、各種新聞紙の該店より販賣配達せらるゝもの頓に增加し、其數殆ど千位に上下す、今其紙名を擧ぐれば、第一長崎新報、第二時事新報、第三都新聞、第四中央新聞、第五大坂朝日、第六國民新聞等の數種にして、郵便に由て來るものあり、滊船に依て來るものあり、郵便に由て來るものは、到着時刻を違へざるも、滊船に依て來るものは、稀に到着時日を衍ることあり、此れは是れ、風雨の爲め滊船の進航せざるに因るものにして、人爲を以て抗制し難き天災なれば、夫の漫に配達の遲延を詰らむより、寧ろ佐崎間鉄道滊車の速成を努めて可なり、凡ろ

新聞紙の事業たる、尚義的事業に屬し、營利的事業に屬せず、故に時としては社會上、暗夜の燈明と爲り、機としては政治上、回生の神藥と爲り、毎に大功を社會に建て、常に偉績を政治に奏す、然れども筆を取る者罰わり、賞あること無く、財を理する者損あり、益あること無し、世間無限の事業中、責任重くして報酬少きは、新聞紙業に如くもの無けむ、嗚呼天下の憂に先つて憂ひ、天下の樂みに後れて樂む、慷慨義俠の士にあらずんば、焉ぞ能く斯至難の事業に服するを得むや、彼の旦に苦情を唱へて、僅々數葉の新聞紙價を償はざらんと欲し、夕に百金を抛つて、青樓一刻の春夢を買ふ者、其良心に省みて、内に疚ましき所無き耶、

事業家

佐世保に於て事業家を以て、目す可き人鮮しとせざれども、最も有力にして著名なるものは左の數氏ならむ、

市村正太郎氏が邸宅は上坊に在り、氏は元東京の人、佐世保鎮守府創設以前に在つては、朝鮮なる日本公使館を建築し、沖繩縣廳を建築し、佐世保鎮守府創設以來は、其諸般の土木工事を請負ひ、其功績最も著しく、公私の信用厚く、請負業の外、志久、松島の兩炭坑を有し、名聲頗る高し、

竹田三郎氏が邸宅は上坊に在り、氏は佐世保唯一の麵包製造所を有し、明治廿一年以來、鎮府の用達は須臾も絶へず繼續し、昨年の如き其製額實に數百萬の巨額に達し、松島其他に於て夥多の炭坑を有し、本店は長崎に在りて、實業社會の斗星として名聲遍く四方に揚る、

石炭

佐世保港産出の石炭、壹ヶ年間の採掘額、及其種別を左に記す、

山ノ田炭　九千萬斤　横尾炭　五百萬斤

中通炭　四百萬斤

此他山ノ田焦炭　二萬俵(但三十斤入)

鑛業家

佐世保在住の鑛業家は左の諸氏なり、

竹田三郎　市村正太郎　松尾治近
田崎秀藏　瀨尾曾一　宮原常重
松永末吉　鴫川友四郎　松田德三郎
佐保元治　益永兵吉　久家九平
大佐古米吉　豐里原太郎　永吉アヅマ
篠崎寛行

松尾治近氏が館宅は濱田街川端筋に在り、氏は山ノ田鑛主にして現に長崎縣鑛業組合取締役の要職に在り、富豪を以て其名聲

遠近に遍し、

田崎秀藏氏が館宅は濱田街川端筋に在り、氏は山ノ田炭坑主にして、長崎縣坑業組合支部長たり、隨て坑業社會に其名著し、

請負業家

山を除きて平地と變じ、海を塡めて桑田と化し、空中に橋を架し、地底に道を通し、旦に木石を百里の外に求め、夕に雲閣を回踵の內に築き、一人にして百人の事を辨じ、萬人の業を一人に聽く者、土木請負業家に覓めずして將た何處にか得ん、是れ則ち新開の地に土木請負業家の必要ある所以なり、佐世保在住の請負業家を擧ぐれば左の如し、但市村事務所は上坊に在り、橋本淸氏が本宅は長崎に在りて、其事務所を佐世保矢岳に設く、

大倉土木組　市村正太郎　橋本淸
蒲原基輔　江口貞風　廣瀨吉次郎

大串重五郎　中島小十郎　林信太郎
山本丑之助　前田文次郎　土岐頼信
間染太郎　古賀忠三　山田俊藏
藤永重吉　安田熊七　中島甚三
檜垣清太郎　稲富常二郎

醫士

港内醫士の數總べて十有余名、就中國手の名聲最も著しきものを擧ぐれば曰く富田原之助、曰く七種周哲、曰く吉田三省、曰く渡邊淵、曰く池田頼太郎、曰く川崎玄龍、曰く松竹勝次、曰く松添寶一、曰く福田晋吾、曰く梶原平治、曰く松尾稔の諸氏卽ち是なり、

富田氏の館邸は上坊に在り、數仞の石垣は城郭なるかと疑はれ、嚴然たる石門は官廳なるかと思はる、館邸の宏大は無數の患者を待つに足り、土地の高燥は患客の平癒を促すに足る、接診懇切施術、神妙、聲望最高し、

吉田氏の醫館資生堂は天滿街に在り、巧なる建築は客を容るに便なり、美なる雅飾は賓に接するに可なり、脂車庭に待つあり、駿馬廐に待つあり、緩急請に應じ、峻夷意に介せず、近日又數千金を投じて、一大醫院を建築せんとす、功成るの日は、人をして其壯麗に驚かしむるものあらむ、盛なる哉吉田氏の家運、

七種氏は、其館邸を天滿街西公園の下に搆ふ、土地高燥、建築潔麗、富豪を以て四方に知られ、刀圭社會の名流たる耳ならす、地方公共の權務に、名譽の職稱を佩ひ、佐世保大字琴平坊に診察出張所を設け、名聲甚盛なり、

渡邊氏の醫院は八幡街に在り、院宇壯宏、室裝美麗、患客席に滿ち、藥局繁忙を極む、氏が國手の名ある蓋し故ある哉、

川崎氏が川崎假病院は、天滿街西公園の下に設けらる、氏は普通病客の外、小佐世保遊廓の檢徴治療を擔當せるが故に、多數の患者室に滿ち、院況頗る盛なり

池田氏が起春醫院は上坊に在り、氏は元佐賀の人にして、夙に名手の聞あり、居を佐港に移せしより以來、既に數霜を經て信用益厚く、患人亦甚多し、

松竹勝次氏は其醫療所を本島町に設く、氏も亦開業日尚淺しと雖とも貧賤を侮らず、偏に懇切を旨とせるが故に評判頗る好し、

松添寶一氏は、齒科を以て專門と爲し、濱田街に其出張所を設く、氏が家は累代齒醫を以て遠近に聞ゆ、當主に至つて彼の有名なる東京高山紀齋翁の流を酌み、其技倆素より凡に超ゆ、加之、幾多の盛家と親交せる人にして、氏が施術に滿足するもの擧げて數ふ可からず、

梶原平次氏は、婦人科及産科を以て專門と爲す、假に醫院を天滿街藥湯通に設く、氏は五島の人にして、大學婦人科室に入り、該科を卒業し、昨年十一月開業せしより、日尚淺しと雖も、治効頻に擧がり信用漸く厚し、

松尾稔は、專門の獸醫にして佐世保大宇折橋に僑居し、一面は屠牛の診治を掌り、一面は普通の聘托に應じ、名望頗る大なり、

福田晋吾氏は天滿街に寓し、齒科を以て專門と爲し、廣く患者の療診を聽き、其名譽も亦自ら顯著なり、

魚市場

魚市場の佐世保港に在るもの二、曰く木下魚市場、曰萬屋魚市場即ち是なり、木下魚市場は佐世保橋東詰に在りて、毎日午前八時より開き、午後二時に至るを以て例と爲す、四方島々の鮮鱗、八方浦々の大魚、皆悉く此市場に上る、相浦よりするものは人肩に頼

り、荷車に依つて來り、庵浦、瀬戸、松島等よりするものは、漁舟に積み、輕舸に載せられて來る、貴賤貧富の別無く、男女老幼を問はず、東より西より、南より北より、群がり集まる人、其數幾千なるを知らず、下口は餅店を圍み、上口は酒舖を繞り、管簿は帳合に筆の禿るを覺へず、主計は運算に爪の減るを知らず、宜なる哉、此市一ケ年間の賣揚金貳萬余圓の多額に達せること、其盛況は以て佐港繁昌の一班を窺ふに足れり、

勸商場

勸商場は八幡街に在り、出入必ず大門よりす、門内左側に茶亭あり、場に入れば左に行くも可なり、右に行くも可なり、左に行くも曲折數回終に場口に出づ可く、右に行くも曲折數回終に場口に出つ可し、其狀恰も凹字に似たり、場内掲示あり曰く、規定第一兩店互に替品を爲す可からず、第二購求客を待たせ、當場外より物

品を取入れ賣る可からず、第三他より購客を誘導す可からず、第四正札代價より聊たりとも引下げ賣る可からず、第五購客に對し算盤を以て物價の談話を爲す可からず、第六物品には總べて正札を附し置く可し、場内店數總べて十有八、其商業の種別を擧ぐれば、曰く陶器、曰く漆器、曰く金物、曰く文具、曰く雜貨、曰く書籍、即ち是なり、就中雜貨店最も多きを占む、或は童男の掌を撫し揖再揖して購買を促すあり、或は少女の鶯音低聲して愛嬌を薦くあり、素見百遍して一品を買はざるものは、無聊を慰するの閑人ならむ、往還千回一物を求めざるものは、債鬼を避くるの貧奴ならむ、令閨も臨み、貴嬢も臻り、嫗婆先んじ、寡婦後れ、愛妾は徐々、下婢は匆々、孩兒走り、杓子馳せ、娼妓の道中は晝間に限り、藝妓の膝栗毛は夜中に定まり、跛者の運動は仍ほ可なるも、盲者の素見は面白からず、毎日午前九時より開き、午后九時に至つて閉づ、顧客

の出入、日に數千人、一日の賣額亦數百金、豈其れ盛なりと謂はざる可けんや、

糶賣場

糶賣場の三大文字は、軒燈に書かれ、庭上街上人の山を築き、店内高き處に一賈人の立つあり、帽子を手にし叫んで曰く、此れは是れ英京龍動に於て作られ、横濱十八番館の手を經て、某貴顯の求められし上等の帽子にして、未だ一點の汚れ無く、未だ毛頭の瑾無し、價幾何なりや、甲客曰く一孔方、乙客曰く半錢、丙客曰く拳骨、丁客曰く半助、賈人曰く善し之を丁客に與ん、賈人又一領の防寒服を手にし、大呼して曰く、此れは是れ、羊皮を用ひて造りたる、古今無類の防寒服にして、去年征清の役、海城攻擊の際、我軍人の分捕たる依將軍が遺物なり、價幾何なりや、甲客曰く無價、乙客曰く拾錢、丙客曰く五拾錢、賈人曰く善し之を丙客に與ん、賈人又砲丸

一箇を手にし、大聲して曰く、此れは是れ、前年豚狩の役、豚軍より發せし爆裂丸なれとも、我大日本皇帝陛下の威稜に怖ぢけむ、飛ひ來つて爆裂すること能はさりし怯丸にして、床上の裝品には最も妙ならん、價幾何なりや、甲客曰く壹錢、乙客曰く拾錢、丙客曰く百圓、賈人曰く善し、之を丙客に與ん、丙客素一錢を有せす、忽ち逃走其影を消す、群衆哄然大に笑ふ、此の如くして一物を賣れは一品を出たし、一器を糶れは一具を現はし、暫時にして數十物を拂ひ、頃刻にして數十金を收め、狀況漸く佳境に入る時、群中忽ち聲あり曰く、掏兒あり警戒せよと、此れは是れ濱田街糶賣場繁昌の景況なり、

夜店

夜店は天滿街、本街、濱田街等、各街到る處に開く、其數甚た多しと雖も、其鬻く所、概ね雜貨に止まり、草木花卉、魚鳥、衣服、日用器具の

類を闊く無きは遺憾なり、只其れ店床の璃燈、煌々として街道を照らし、自ら通行の人に便を與ふるは好し、

寄席

堂々たる綠門は館前に造られ、交叉したる一對の大國旗は、飜々として戰勝の威風を帶び、千百の球燈は、星の如く輝き、佐世保港青年實業大演說會の十二大文字は、丈餘の大標に記して掲げられる、此れは是れ數日前より、長崎新報の特別廣告に見へし、濱田街寄席偕樂館に於ける、佐世保青年實業大演說會場の光景なり、散史も佐世保繁昌記著作の材料を獲むものと、筆紙を懷にして會場に入れば、開會時刻に至らざるに、聽衆は既に殆ど場に滿ち、開會時刻卽ち午后六時に至れば、滿場に付入場を謝絕ずとの張紙は、館門外に顯はれたり、偕出席の辨士は總へて五名にして、第一席に登壇したる辨士は、眉秀て眼淸く、鼻高く口緊り、髮黑く色白

く、丈高からず卑からず、肉肥ゑず瘦せず、一點の非難無き好男子にして、木綿織の袷を着し、博多織の帶を結ひ、凛々たる風采四邊を拂ふ、開口一番告けて曰く、私は國野爲也と申す一商人でありますが、圖らずも名譽ある諸君と、一堂の內に相見ゆるを得ましたは、幸榮の至りであります(國野君萬歲)、私は蛙說(かわづのゆつ)てふ演題に就いて、簡短なる演說を致します(謹聽々々)諸君よ我國は戰勝の結果に由り、東洋の孤島より、一躍して世界の强國に列しました、又我佐世保港は肥前の寒村より、一躍して日本の名港に加はりました(愉快々々)强國の實を保たむと欲せば、富國の力を養はなければなりませぬ、富國の力を養はんと欲せば、實業の發達を計らなければなりませぬ、實業の發達を計らむと欲せば、既往に鑑み、將來を慮り、現在を善くせんければなりませぬ、現在を善くするの手段は大小あり、緩急あり、一朝一夕に論じ盡くされぬ次第で

ありますけれども、先づ小より大に及ぼし、急より緩に及ぼす順序を以て、述べようと考へます、第一、賣手と買手の關係は如何なるやと云ふに、買手は必要あればこそ買ふなり、賣手は其必要に應ずるものなれば、買手必しも貴きにあらず、賣手必しも賤しきにあらず、故に買手が頭を三寸下ぐれば、賣手も頭を三寸下げて充分なり、買手が賣手に向つて、其方と言へば、賣手も買手に向つて、其方と言つて、可なり、今日の商工業家は、昔日の素町人土百姓に比ずれば、智識もあり經驗もあり、月と鼈、黄金と瓦石の違があるから、何でも威張るべし、威張らなければ、實業家の位地が下ると考へ、番頭は主人を見習ひ手代は番頭を見習ひ稚丁は手代を見習ひ、炊婦は稚丁を見習ひ、犬猫は炊婦を見習ひ、徹頭徹尾、此頭下べからずと云ふ、憲法を守りて、生意氣なる言語を發し、無禮極まる舉動を爲す者が、近來澤山出來ました、成程理論上に於ては善けれども、實際上に於ては、其れが爲め暗々裡に招く損害は、莫大なるものです（ヒヤ〳〵）故に會社なり、商店なり、旅舍なり、問屋なり、湯屋なる、理髮床なり、料理屋なり、貸座敷なり、何等の商業に拘はらず、主客の關係を誤らぬよふに注意して、資本の入らぬ愛嬌は、タップリ、蒔くべしてふ、憲法を守りては如何でしよう、私は斯した方が妙ならむと信じます、（ヒヤ〳〵）第二實業の發達を計らむとせば、同業互に相警め、同商互に相援け、常に弊害を未發に豫防して、信用を失はぬようにせなければなりませぬ、政府が同業組合てふ團体を結ばせた理由は、全く此に在ることです、然るに、些少の利を目前に爭ふことを知る者は多けれども、莫大の益を永遠に謀る者の少きは、甚歎すべき事であります、諸君希くば、自今同業相集り、同商相會し、同業組合の規約を嚴密にし、且つ之を堅く守りて、所謂信用を絶つの亦とも言ふべき、弊害其物を退治

する、とを努めねばならぬと信じます、（同感々々）第三、佐世保の新事業として、有志家の經營すべきものは、數へられぬ程でありますけれども、目下の急要問題としては、道路を修繕する事、各所に便所を新設する事、水道を布設する事、電燈會社を設立する事、警察本署を設置する事、郡役所を新置する事、裁判所を新置する事、新聞雜紙を發行する事、此等の問題に就きましては、苟も佐世保の繁昌を希望する有志家なれば、一身一家の利益を犧牲にするの覺悟を以て、盡力せらるゝことと信じます、以上三條の意見は、極めて小なる事と、至つて急なる事とを擇びて述べたに過ぎませぬけれども、進歩主義を取り、先見者を以て自ら任じ、我國の將來を憂ひ、我港の前途を念ひ、我身の末來を案する人なれば、必ず同感ならむと信じます、諸君彼の蛙を見よ、蛙は能く飛ふものです、然れども、又能く息むものです、故に多くの時間を費しながら、遠きに行くことが出來ない、又眼孔は後方に向つて具はつて居るから先方を見ることが出來ない故に、或は河泉溝澤に陷りて溺死し、或は蛇に狙はれ、呑殺されます、堂々たる世界の強國なる大日本帝國の實業家は、蛙の如く息まぬ樣にせねばなりませぬ、然せぬときは不進歩主義の實業家となります、又眼孔を前方に具へなければなりませぬ、然せぬときは不先見の實業家となります、嗚呼諸君よ東洋の將來には、大砲の煙や彈丸の雨や血の海や骨の山の嶮は無きか、嗚呼諸君よ三年の後には、內地雜居の事は無きか、嗚呼諸君よ諸君の前程には、鉄道瀛車が生存競爭の大氣焰を吐きつゝ來る無きか、思ふて此に至れば、今日が無ければ明日があるとか、來年の事を言へば鬼が笑ふとか、長閑極まる夢を見ても居られまい（然り〳〵）、奮發一番、手に唾して起たねばなりませぬ、と結論して壇を下り、會主壇に顯はれ報じて曰く、他に四

名の辨士があります、は料とて、時間も乏しく、且つ筆記者六無散史は、今夕の演說を佐世保繁昌記に載せらるゝ由なれば、長演說は紙面を奪ふの虞もありますが故、此にて閉會に致します。

遊技場

遊技場に二種あり、一を玉突場とし、一を大弓場とす、玉突場は天滿街、小佐世保街の兩所に在り、大弓場も亦小佐世保街に在り、四季其繁昌を異にせず、

演武場

滿清の野、劍電漸く光を消し、黃渤の海、砲雷既に聲を絕ち、東洋の平和稍克復せられ、赳々たる數十萬の貔貅は、赫々たる功名を双肩に荷ひ、凱歌を都鄙に揚ぐるの好運に會す、豈其れ快哉を叫ばずして可ならん哉、然りと雖も世界の大勢は、吾人が苟安を允さゝる耳ならず、益一大危機に向つて吾人を驅りつゝあり、血性ある櫻國男兒、誰か慷慨せざるものゝ之れ有む、於是乎軍備擴張の聲は國民の聲と爲り、國民の聲は議會の聲と爲り、山川爲に容を改め、草木爲に靡かんとす、戰勝の國運、應に此の如くならざる可からず、東洋の雄國、當に此の若くならざる可からず、今也軍備擴張の實將に大に擧らんとす、以て三國の同盟を待つに足る可く、以て世界の同盟を待つに足る可し、豈其れ盛矣を叫ばずして可ならんや、然りと雖も一軍の經は箇人なり、三軍の緯も亦箇人なり、箇人怯弱なれば一軍勇强ならず、一軍勇强ならざれば三軍亦勇强ならず、戒しむ可きは箇人の怯弱なり、培ふ可きは箇人の勇强なり、佐世保先達の士等此に感あり、演武場を濱田街に建築し、以て擊劍柔術を習錬するの所と爲す、夫の治に居て亂を忘れずとは、其れ佐世保先達の士等を謂ふ乎、

競馬場

競馬場は折橋の丘上に造らる、周圍千歩以て四轡を駢ねて馳す可し、四時の開催其幾回なるを知らず、一度開催の廣告を掲ぐれば、駿脚十里を遠しとせずして集り、驥足嶮峻を厭はずして會し、貴賤貧富を問はず、男女老幼を別たず、棧に滿つるの人は霞の如く、埒に繞るの客は堵に似たり、一鼓して轡を列ね、再鼓して轡を放ち、三鼓して勝負を決す、勝負決する毎に喝采の聲山壑を震動し、勝者は旗を飃へし、賞を得て、意氣の揚々たると、金鵄勳賞を拜し、錦衣を着て故郷に還る名將も、三舎を避くる風情なり、賞を得ず、笑を招き、顏色蒼々たると、彼の連戰連敗の後、兵を失ひ、城を失ひ、砲を失ひ、艦を失ひ、歸るに家無き庸將も、跳で逃るの容体なり、勝者の滿足素より異とするに足らず、負者の失意亦何ぞ怪むに足らん、然れども勝負榮辱は事物の數なり、今日の負者、他日の勝者たらざるを保せず、現在の榮者、未來の辱者たらざるを保せず、負者未だ侮る可からず、勝者未だ驕る可からず、國を憂ふるの士其感今日果して如何、

旅舎

旅舎に四種の別あり曰く旅籠屋、曰く下宿屋、曰く木賃宿、曰く船宿卽ち是なり、旅舎の良否は土地の盛衰に關係すること、恰も細君の賢愚は良人の窮達に關係するに似たり、家屋の結搆以て衆客を容るに足らざる乎、是則第一の不可なり、洒掃以て衛生を守るに足らざる乎、是則第二の不可なり、飲食の調理以て旅客を歡はしむるに足らざる乎、是則第三の不可なり、器具寢被の清潔、以て羈客を安んずるに足らざる乎、是則第四の不可なり、客室の鑰函、以て貴品を保するに足らざる乎、是則第五の不可なり、送迎の禮儀、以て群賓を待つに足らざる乎、是則第六の不可なり、僕婢の言語動作、以て紳賓に接するに足らざる乎、是則第七の不可なり、

宿泊料の等級表を客室に掲示せざることある乎、是則第八の不可なり、車馬賃渫船賃等を表示せざることある乎、是則第九の不可なり、宿料の不當、以て旅客を喫驚せしむることある乎、是則第十の不可なり、自家の漱盥には、温湯を盛り、賓客の漱盥には冷水を注くことある乎、是則第十一の不可なり、甲客の殘肴餘飯を乙客に供することある乎、是則第十二の不可なり、茶料を投せざれば殊更に冷遇することある乎、是則第十三の不可なり、僕婢に纏頭を與へざれば、當然の指命も服從せざることある乎、是則第十四の不可なり、豫め宿料の等級を問はずして、妄に多錢を貪ることある乎、是則第十五の不可なり、都容美裝の客に見ゆるに、蛭子然たる顏を以てし、野態粗服の人に會ふに、鬼瓦乎たる面を以てすることある乎、是則第十六の不可なり、佐世保の旅舍は總べて五十三戸にして、之を種別すれば、旅籠屋三十五戸、下宿屋五戸、木賃宿十戸、船宿三戸、就中其著名なるものを擧ぐれば左の如し、

油屋は天滿街に在り、三層の大廈、巍々として空を凌ぎ、客室幾十、以て千百の客を容る可く、門庭廣濶、以て數頭の馬を繫く可し、館丁數名、舍婢幾人、厨奴、管店各其人を得て、膳器、寢具、悉く貴賓を待つに稱ひ、敬意人に接し、誠心事を理す、油屋の名聲日に高く、賓客の投泊頻りに多き、蓋し亦故ある哉、

播磨屋は濱田街に在り、洋風の層樓、堂々として宙に聳へ、器具全備し、接待懇到にして、良舍の名頗る高し、

萬歲屋は濱田街に在り、樓高くして眺望に適し、室多くして衆客に宜しく、器具新潔にして接客懇切なり、開業日尚淺しと雖も、顧客頻りに臨む、

瑞穗屋は濱田街に在り、層樓は高く、客室は潔く、一切の器具悉く新造に係り、絹衾は以て貴紳を待つに足り、珍膳は以て賓客を饗

するに足る、家人の注意周到なる、僕婢の服命敏速なる、蓋し稀に見る所の良舍たり、

此他濱田屋、武雄屋、小佐々、小倉屋、富村屋、岩見屋、塩田屋は濱田街に在り、高橋、泉屋、清水屋、唐津屋は濱田街に在り、長崎屋、武藏屋、成富屋は、天滿街に在り、杵島屋、吉野屋、山吹屋、三浦屋、鹿德屋、は本島街に在り、山口は横尾に在り、何れも良舍たり、

廻漕屋

佐世保は大艦巨船の出入頻繁にして、廻漕の業も亦甚盛なり、廻漕店の數總へて九戸、其濱田街に在るもの七戸、曰く鶴谷、曰く肥前屋、曰く靜廻舍、曰く富村屋、曰く三輪屋、曰く丸屋、曰く福島屋、卽ち是なり、佐々木廻漕店は本島街に在り、就中鶴谷、丸屋、福島屋、靜廻舍、富村屋、佐々木、七戸は長崎平戸間の滊船航路に對する廻漕店にして、其船名、發着時限、運賃等は左表に明示す

船名

八千代丸　中等
代陽丸　中等
肥前丸　上等
玖島丸　下等
下等
下等
中等
下等

發着時限表

長崎	發	午前九時
佐世保	着	午后二時
佐世保	發	午后三時
平戸	着	午后七時
平戸	發	午前三時
佐世保	着	午前七時
佐世保	發	午前九時
長崎	着	午后二時

流船運賃表

長崎佐世保間		佐世保平戸間	
上等	壹圓	上等	八拾錢
中等	八拾錢	中等	六拾錢
下等	五拾錢	下等	四拾錢
瀬戸松島佐世保間		面高佐世保間	
上等	七拾錢	上等	六拾錢
中等	五拾錢	中等	四拾錢
下等	三拾錢	下等	貳拾錢

參考

●運賃ノ外食料一回ニ付　六錢

●乘込端艇賃　三錢

●上陸端艇賃　五錢

●寄港　面高　松島　瀬戸

●郵便物搭載地　長崎　瀬戸　平戸

鶴谷は濱田街川端通に在り、廻漕業に兼ぬるに旅籠屋業を以て す、三層の高樓は崖嵬として漢に聳へ、裝飾美麗にして待客懇切 なり、貴人莅み、富客到り、門前車馬市を爲し、信用甚厚し、丸屋、福島 屋、靜廼舍富村屋、佐々木の五店は、何れも荷客に對し注意周到な るを以て、其名特に著し、

肥前屋、三輪屋の兩店は、佐世保大坂間の流船航路に對する廻漕 店にして、其寄港地及運賃等を左表に明示す、

上陸地	中等	下等	
平戸	六拾錢	四拾錢	
伊萬里	九拾錢	六拾錢	

呼子	壹圓五錢	七拾錢
唐津	壹圓貳拾錢	八拾錢
博多	貳圓	壹圓三拾五錢
馬關	貳圓三拾錢	壹圓五拾五錢
門司	貳圓三拾錢	壹圓五拾五錢
三ケ濱	貳圓八拾五錢	貳圓九拾錢
今治	三圓拾五錢	貳圓三拾五錢
多度津	三圓五拾錢	二圓三拾五錢
神戸	四圓八拾錢	三圓貳拾錢
大坂	四圓八拾錢	三圓貳拾錢

上等ハ中等ノ五割増

上陸地	中等	下等
長崎	七拾五錢	五拾錢
島原	壹圓貳拾五錢	九拾錢
三角	壹圓五拾錢	壹圓
若津	貳圓貳拾貳錢	壹圓五拾錢

參考 大坂行ノ荷物運賃ハ一才ニ付八錢

肥崎滊船取扱所なる肥前屋、即ち岩永廻漕店は、濱田街川端通より名切通に入る處に在り、開業以來未だ期年ならずと雖も、普く江湖の信用を博し、華客益加はり、荷物愈増し、一見して以て其繁昌を知るに足る、蓋し店員各其人を得て、客に接する恭敬を旨とし、事を處する敏捷を主とするに由つてならん歟

荷受問屋

荷受問屋の港内に在るもの、其數總べて十六戸、就中濱田街川端通江代、松永、古賀等最も繁昌を極む、

酒　舗

港内酒舗の數總て六十有二戸、就中其著名なるものを左に摘記して世の猖獗に紹介せん、

福島末一氏か酒舗窓の梅は、天滿街に在り港内三所の支店を開き其販賣する所の酒は、攝津灘なる加納治郎右衛門氏醸造の正宗、堺大塚氏醸造の金露、及自醸窓の梅の三類にして、港内最も多くの顧家を有し、兒童走卒に至るまて、窓の梅の店名を知らざる者無きに至る、

川原田酒舗は濱田街佐世保橋通に在り、其一手專賣の酒は六種あり、曰く菊正宗、曰く櫻正宗、曰く總隊長、曰く天祿、曰く新小町、曰く自醸菊水、即ち是なり、

平山酒舗は濱田街佐世保橋通に在り、其販賣する所の酒は、堺柴谷長平氏醸造に係る國民、一、金水の二種にして、上口社會の好評を博せり、

瀨頭酒舗は濱田街に在り、銘酒隊長、其他の數類を販賣す、

中島茂太郎氏か酒舗は、濱田街國道筋に在り、其販賣する所の酒は、有薫、池龜、横綱、總司、盛典の五種なり、

此他天滿街井手、高椋、丸善、本街富田、小林、濱崎、濱田街染川等の如き皆是港内屈指の名舗たり、

味噌醬油商

味噌醬油商店は拾八軒あり、就中天滿街丸善商店を以て最盛なりとす、近日亦濱田街名切通に新築せる、松尾寛光氏が商店も亦有力なりと云ふ、

材木商店

材木商店は總て七戸、就中其盛大なるものを擧ぐれば、森又吉、松永泰慶、喜々津兵十、古賀庄七、兒玉城輔、小池作一の數氏か商店にして、何れも濱田街川端筋に在り、

書肆

天滿街に五郎川商店あり濱田街に樺島商店あり何れも繁昌せり、然れども其關ぐ所の書籍は、概ね小學教科用の圖書にわらざれば、稗史小說の類にして、横文原書は言ふも更なり、高等專科の書籍に乏しきは、適ま以て此地人目の注ぐ所を知るに足らむ歟、

藥舗

港内九戸の藥舗あり、就中最も信用を博し、盛大を極むるものは本街小笠原藥舗、濱田街荒木榮盛堂分店、岩永藥舗等にして、荒木分店に於て各府縣下の有名なる賣藥は、殆ど網羅して販賣し、其盛大全港第一たり、

吳服太物商店

吳服商店は總て拾一戸、就中信用を博し繁昌を極むるものは、天滿街に永見、新居、山本あり八幡町に谷口あり、其他は店稍大なれば信用乏しく、品稍多ければ番頭驕り、兎角太皷拍子の揃ひしものは、晦日の月と、四角の卵に一般ならん、

金物商店

港内金物商三戸あり、曰く本街富田、曰く尾崎、曰く天滿街齋藤卽ち是なり、齋藤商店は鎭守府用達を勤め、其商業の昌盛なると信用の厚きとに至つては、自ら特殊の姿あり、

紙商

紙商店は總街五戸あり、而して諸品悉く備はり其價亦廉なるは天滿街平川商店なり、

質商

質舗は總て五戸、就中有力にして信用厚きは、本街濱崎商店、八幡街太田商店なりとす、

古着商店

古着商店は六軒あり就中本街川尻商店最も有力にして盛なり、

兩替店

黄金雨の如く降り、紙幣花の如く飛ふ商業頻繁の佐世保に於て、必要缺く可からざるものは兩替店なり、彼の拾圓紙幣を握り、向三軒兩隣に巡禮して半日を費し、百圓免券を鼻頭に陳列して、戸毎に兩替を口説かんより、濱田街佐世保橋通平山兩替店に行くに如かず、

量度衡店

度量衡商小林代理店なる岩永度量衡店は天滿街に在り、港内他に同商無きが故に繁榮せり、

屠畜場

屠畜場は折橋免巖谷口に在り、明治十八年七月の建築に係り、現今該場の實權者は、天滿街井手乙松氏にして、屠牛の數は一日平均六頭なりと云ふ、

牛乳飼畜場

豪商田中國吉氏が牛乳飼畜場は、中通免福泉原に在り、氏は明治廿年始めて斯業を營みしより、鎮守府の用達は氏に命せられ、以來今日に至る迄、一日の如く繼續せり、蓋し乳質の佳良なること他に比類無きに由る歟、

陶器商

陶器商店は總て十軒、就中品質好良にして、價金低廉なるは、天滿街香蘭社支店、田中商店、濱田街口石商店の三店なりとす、香蘭社は佐賀縣有田の豪商深川榮左衛門氏の有にして盛名、海の内外

に陰れ無し、

鐵工場

鐵工場として見る可きものは、唯一所に過ぎず、左鐵工場卽ち是なり左鐵工場は濱田街名切通に在りて、手腕の精妙と工業の盛大は人既に之を知る、

鍛冶屋

鍛冶屋は總て十有五戸あり、就中池田幸次郎氏が工場精工の評あり、

人力車

港内の腕車は總て百六十五輛、西は相浦、佐々、江迎を經て平戸に通ず可く、東は早岐に達し、岐れて左右兩道と爲り、右は川棚、彼杵、大村を經て長崎に到る可く、諫早を經て島原に抵る可し、左は有田を經て武雄に臻り、以て九州鐵道に連絡す可く、若し其れ有田に到らずして伊萬里に向ひ唐津に出て、唐津より濱崎、福吉、深江、前原、今宿を經て福岡博多に赴き、以て九州鐵道に連絡するも可なり、其車賃の如きは、官署の規定無きにあらざる可しと雖も、佐世保、早岐間里程三里に三拾錢、乃至六拾錢を要することあれども、其要求に應せざれば挽夫の動かざること奈良の大佛の如く然り、於是乎旅客畢に其要求を容るゝに至る、以て佐世保の繁昌を推了す可し、

馬車

馬車の數總て四輛、其狀宛然東京の三太郎馬車に異ならず、停車場を濱田街に設け、日々佐世保、早岐間を往復す、乘客一人の賃錢、拾三錢乃至拾八錢を通常とす、其風雨の日夕に會せば、例に由て二割增を要す可し、

荷車

荷車の總數三百三輛、囂々戛々安眠を破り人語を妨くと雖も、百貨足を生して自ら走り、萬物翼を張つて自ら飛ぶの新世界を見るに至らざれば、荷車亦廢す可からざるなり、

活版印刷所

活版印刷所は二個所あり、一は上坊に在りて、以文舍と稱し、一は濱田街に在りて魁成舍と稱す、

時計商店

總て五軒あり、天滿街岡、中野、山口の三軒最も著名にして信用厚しと云ふ、

寫眞師

總て三軒あり、濱田街溝井、上坊井上、八幡街戸田卽ち是なり、

雜貨店

雜貨店は總て拾六軒あり、就中其盛大にして良品を鬻ぐ店は天滿街新兎、大島、人形屋、八幡街松田の諸商店なりとす、

挿花指南所

挿花指南所は谷鄕に在り、鎭壽齋一靜と號し其流義は遠州流なりと云ふ、彼の和歌の宗匠なる八幡街五郎川翁と一對の風流なり、紅塵に渦卷かるゝ佐港にして此雅人あり、豈奇ならずや、

料理屋

割烹亭の谷街に散在せるもの、其數總べて七十有三、就中名樓と稱すべきものを擧ぐれば、曰く豐藤、曰く青餅、曰く玉川、曰く色葉、曰く江戸惣、曰く青柳、曰く翠濤園、曰くト一、曰く久米善、曰く千年亭卽ち是なり、

豐藤亭は濱田街に在り、二層の大樓堂々として四隣を壓し、紳客雲の如く臨み、豪賓霞の如く集ひ、門外の車聲は門内の絃聲に和し、其盛況は自ら名樓の實を現はせり、

青餅亭は本街に在り、亭々たる層樓は嚴然として高地に蟠り、數級の石階は石門に續き、幾臺の璃燈は焯々として暗夜の昇降を警め、樓上は盛宴を張るに宜しく、樓下は嘉會を開くに宜し、酒は金露、正宗、唯是命の儘、肴は川魚、海鮮、唯是命の儘、加之小三、〆子、清葉、小桃、秀子、小濱の歌嬌、粧を凝らし衣を飾り、所長の技を演じて興を割くるあり、眞に是れ自由快樂の別乾坤なり、

玉川樓は八幡街に在り、左は田圃を控へ、右は佐世保川に枕し、層樓は高くして眺望に適し、庖厨精巧、器具珍雅、待遇懇到、價格低廉、貴顯の燕遊多くは此樓に於てす、近日又一棟を新築し、其竣工遐きに在り、玉川樓の前途多望なりと謂ふ可し、

色葉樓は天滿街に在り、層樓霄を凌き、蒔繪金露は累々として厨に堆く、鮮鱗巨鯉は潑々として池に躍り、庭上無心の百花は樓上解語の花に對し、四時怠らず嬋妍を競ふ、金線の帽を脱して蹈るの英雄も之れ有ん、金裝の劍を枕にして眠るの豪傑も之れ有ん、盛なる哉色葉樓、

樓上の紅燈は月の如く、軒外の彩燈は花の如く、通行の士人をして月花の情に禁へざらしむるものは、天滿街江戸總樓の光景なり、巧妙なる庖厨は以て都人を慰め、華麗なる裝飾は以て傖夫を驚かしめ、將軍臨み、士卒臻り、賈人登り、耕夫之き、晝は歌吹の海と爲り、夕は不夜の城と爲り、眞に塵寰中の別仙窟たり、

青柳樓は濱田街名切通に在り、三層の傑樓嵬々として雲漢に聳へ、其廣大なる以て群客を集む可く、其綺麗なる以て大賓を待つ可し、殊に此樓自養の絃妓、小久、龜龍、辰、等の數名、皆是れ上國鍛錬

の健腕にして、粋客歡を罄すの器に稱ひ、且つ銘醇豐ならざるに非ずと雖も、命下らざれば妄に進めず、佳肴多からざるに非ずと雖も、命到らざれば強いて侑らず、青柳樓の好評は粋士社會に喧しく日に盛なる亦故ある哉、

ト一亭は上坊に在り、久米善樓は濱田街名切通に在り、千年亭、天滿屋、肥吉屋、玉の家は天滿街に在り、皆是れ好評を博せるの樓たり、彼の貴共亭、鶯亭、古川樓、衞生樓、鴨川樓、末廣亭、武嬉屋は濱田街に在り、末廣亭は輕便料理を以て知られ、武嬉屋は會席料理を以て現はれ、花月は茶碗蒸を以て起る、其他逐一記するに遑あらず、

藝妓

佐世保の藝妓は總て八十餘人、其數敢て少しとせず、然れども佐港の妓は、藝名を門戸に標せず、又徽燈を軒頭に掲げず、又曾て檢番の設あること無し、故に散史が如き、斯道に迂なるものは、彼等が巣窟の在る所を詳にせず、只其芳名を花柳社會に知らるゝものを左に記す、但し藝妓には○を附し雛妓には△を附す、

天滿街（三十一人）

○松吉　○花助　○おもちや　○於多福
○松葉　○竹次　○御代治　○御代吉
○品吉　○小品　○明治　○金五郎
○三五郎　○若近　△豆子　○花吉
○愛吉　○愛助　○大吉　○若吉
○松龍妹　○小花　○愛松　△愛子
○小龍　○淺吉　△愛太郎　△小大
○大葉　○豐葉　○松菊

八幡街（二十人）

○金八　○金糸　○峯八　○金助

○寅八　○愛花妹愛吉　△鶴次　○金六
○千代太郎　○千代子　○春子妹奴　○松次妹松吉
○廣次　○松一　○松助　○千代吉
○奴　○桃太郎妹春吉　○雪松　○玉世

本街（七人）

○小三　○〆子　○秀子　○清葉
○小濱　○小桃妹小三　○千代松妹千代吉

濱田街（八人）

○小久　○龜龍　△辰　○仇吉
○若次　○小半　○梅香　○鶴八
○桃吉　○梅吉　○小松

松字を冠する者、其操果して松の如く正しきや否や、花字を冠する者、其容果して花の如く美なるや否や、金字を冠する者、其譽果して金の如く重きや否や、吉字を冠する者、其運果して吉なるや否や、八字を冠する者、八八を好むや否や、將又口八丁手八丁なるや否や、おもちゃ必しも客の翫弄とならざる可し、お多福必しも顏の凹きか故ならざる可し、散史妄に容姿の醜美を言はず、又苟も技藝の巧拙を語らず、世上幾多の才士、若し彼等が機密を探らんと欲せば、須らく黃金を懷にして青樓を巡る可し、

飲食店

飲食店の數總へて百二十七軒、之を類別すれは煮賣店九十一軒、饂飩屋二十三戸、鋤燒屋五戸、氷店三戸、鮓屋三戸、汁子屋二戸、若し其れ此等の諸店を一所に湊むることを得は、飲食街なる一大新街を觀るを得可し、

花街

（貸座敷　藝娼妓）

佐世保港の花街を小佐世保と稱す、小佐世保は本島街の中央より東に距ること五丁許の所に在り、此間道稍斜なれども、腕車兩輛、轅を列ねて馳るを得可し、偖飩屋あり、豆腐屋あり、表具屋あり、印刻師あり、按摩屋あり、飲食店あり、仕出料理屋あり、洋酒罐詰店あり、煙草店あり、郵便切手賣下所あり、理髮床あり、鰻屋あり、私設人力車駐車場あり、全街の妓樓總て十八、其左側に在るものは左の八樓とす、

◎大福樓　◎松柏樓　◎三盛樓
◎省月樓　◎泉屋　◎松鶴樓
◎玉川樓　◎開新樓

其右側に在るものは左の十樓とす

◎遊鶴樓　◎明治樓　◎七福樓
◎筑紫樓　◎新盛樓　◎清月樓
◎大鶴樓　◎朏亭　◎德盛樓
◎白明樓

廓街行き盡す處にも駐車場あり、茶碗蒸店あり、汁子店あり、玉突場あり、揚弓場あり、大弓場あり、裏を望めば上等汁子善哉を以て著名なる達摩亭あり、太陽西山に臼つくの頃、各樓齋しく火を點し、璃燈は燁々として全街を照らし、銀燭は皎々として綺筵に輝き、街上柳櫻の紅綠を競ふ無きも、樓下紅裙の嬋妍を爭ふあり、絃聲鼓聲耳を擊き、舞容蹈狀窓に映し、人をして不夜城の感あらしむ、馬を躍らし劍を閃めかし、千軍を叱咤するの猛將も、鉄蹄一度此鄉に抵れば、神激し、心昂り、拔山蓋世の氣力は忽ち平時に百倍し、進擊一番吶喊數回、鐘聲曉を報ずるの頃、徐に凱歌を揚ぐるを恒とし、汚れたる衣を纏ひ、腐れたる飯を食ひ、錙銖是れ爭ふの客爺も、片脚一回此境に入れば、魂飛び魄散り、倒るれば則ち土を握

つて起つ可してふ韜略は、爰に倏ち一變し、登樓一番遊蕩徹宵、鶏聲歸を促すの時、漸く告別を叙するを例とす此鄉の興味は自ら別殊なる所あるに由て然る乎、

松柏樓

三層の高樓巍峨として雲漢に聳へ、其勢恰も全街を睥睨するに似たり、人若し一度此樓に登り、規模の宏大、樓閣の廣寛、裝飾の華麗、寢被の善美、料理の巧妙、待遇の懇到、勘定の正直、妓貌の優美等を實驗せば、其樓名の四方に轟く所以を知るに足む歟、

大福樓

莊然たる二層の傑閣は、嚴乎たる一大關門の内に築かれ、閨房の簡潔、器具の完全、裝飾の華麗、綉被の精美、庖厨の清良、注意の周到等は、世上嘖々好評高し、殊に主人田中國吉氏は、遊廓取締の要職に在るのみならず、數多の事業に關係し、交際場裡に其名を知らるゝの人なるか故に、其樓名も亦自から遠近に響けり、

遊鶴樓

堂々たる大門を入り仰ぎ見れば、三層の高樓山の如く聳ゆるもの、此れは是れ、有名なる遊鶴樓なり、妓房の多き殆ど四十に及び、娼妓の多き亦五十六人に達す、其盛大の狀況は逐一記するに遑あらず、委曲は粹士の探檢に任せむ耳、

開新樓

三層の高樓峨巍として空を衝き、裝飾美麗を盡し、寢被華奢を極め、金銀相輝き、紅綠相映し、別に立食の廣局を設け、以て大賓豪客の宴遊に備ふ、人若し此樓に登らは、自ら東京芳原の大籬に遊ふの感あらん、

登樓定價

各樓未た等級を設けず、登樓の價金自ら一定なり、之を左に記し、

以て粋士の參考に供す、

金壹圓貳拾錢　（娼妓一人　希數種　美佳酒双瓶）

金壹圓七拾錢　（藝妓兼娼妓一人　希數種　美佳酒双瓶）

客若し酒肴を欲せざれば、菓子なり、茶碗蒸なり、鮮なり、飯なり、各其欲する所の一を擇ひて命するを得可し、凡ろ建築規模の大小、閣室裝飾の美惡、待遇の冷熱、閨情の厚薄等は、各樓各異、各妓各別なりと雖も、各樓概して定額以外の散財を強ゐず、只管淡泊にして無邪氣なるは、蓋し天下無比と稱す可し、人若し散史か言を疑ばゞ論より證據、一夕の行脚を試みて可なり、

登樓の費は必す前收するを例とす、故に藝中無一物にして登樓し、翌朝馬に騎して還るとか、行燈部屋に籠城して、猷娼の差入を頂戴するとかの彌次喜太を演するとは、遺憾ながら此廓に望む

べらず、

甲　君！小佐世保の女郎か耳に聞いて愉快に感するは何であろ

乙　大砲の音サ　甲　イクラ軍港の猫だッて眞逆大砲の音を快愉ともせまい　乙　君も合點の惡い男だ　甲　福神は軍艦に在りサ　甲　成程　甲　君小佐世保軍艦が來れば大砲が鳴るサ　乙　軍人サ　甲　ソレカラ　乙　請負で一番もてる客は何であろ　乙　人サ　甲　ソレカラ　乙　町人サ　甲　逆ふ〳〵　乙　何だ　甲　寫眞師よ　乙　フウ濡手握粟の寫眞師か！寫眞師は女郎を好き！女郎は寫眞師を好き！好いた同志の差向いイヤ違ッた、好いた同志の共稼かイヤ又違ッた取りたい同志の取ッたり取られたりか　甲　酒落てる、此れは是れ素見客中問答の一節にして粋士の參考と爲る可き奇話たり

廓内の妓に三種あり一を娼妓と云ひ一を藝妓兼娼妓と云ひ一

を藝妓と云ふ今日現在の數總て二百四十二人逐一妓名を記して江湖多情の士に紹介せむ、但藝妓兼娼妓は◎を冠し娼妓は○を冠し藝妓は◎を冠す、

松柏樓

◎花吉　◎駒吉　◎浦瀬　◎福松
◎峯八　◎徳松　◎兼吉　◎鶴吉
○泉　○東　○作樂　○清舟
○琴野　○壽賀野　○都　○松枝
○若龍　○東雲　○小米　○九八
○一丸　◎福壽　◎福助　◎卯の葉　◎綾吉
◎百葉　◎百子　○廣吉　○鶴葉

大福樓

○小福　○種治　◎秀吉　◎三玉
○櫻木　○若鶴　○小櫻　○三吉野
◎春日　◎高音　○舞鶴　○壽
◎雅樂吉　◎繁葉　○雪野　○福江
○小梅　○千歳　○重子　○小枝
○錦野　○豐　○小菊　○勝山
○小徳　○小竹　○榮香　○糸鶴
○緑　○竹菊　○棟　○春吉
○小鶴　○靜　○梅香　○朝尾
○階　○若竹　○貞子　○白露
○初音　○三江　○常盤　○八夜
○小花　○霞　○海墨　○皐月

○梅鶴　○竹鶴
○花子　○菊江
○勝田　○藤松

開新樓

◎愛治　◎峯花
○新月　○君江
○静　○開香

三盛樓

◎千代春　◎葉山
○豐治　○玉鶴
○紅葉　○二葉

白明樓

○亀井　○繁子
○薫　○綾妻
○八重鶴　○旭

◎金花　◎奴
○香梅　○新玉
○高千代　○小田巻

◎千代治　○色葉
○玉江　○峯松

◎染吉　○白の江
○貞葉　○一松
○歌子　○木の花

省月樓

◎大吉　◎小高
○小品　○常葉
○久野　○八千代

玉川樓

◎旭川　◎品川
○瀬川　○君川
○千代川　○小浪

七福樓

○梅葉　○小松
○雲井　○白糸
○菊松　○久松

◎小三　○浅子
○小峰　○小光

◎戸川　○三代川
○玉子　○藤川
○清川　○梅川

◎繁吉　○一樂　○若千代　○八重絹
○清鶴　○小千代　○小雪　○常花
○初花　○玉吉　○愛子　○藤江
◎淺吉

筑紫樓

◎金八　◎龍田　○千代葉　○小繁
○大和　○筑葉　○此糸　○照葉

松鶴樓

◎高根　○若菊　○松鶴　○鶴野
○小藤　○橋立　○綠

清月樓

◎大吉　◎熊谷　○竹馬　○桃助
○千人　○千鳥　○若駒　○米葉

○君野　○初菊　○藤野　○牧枝
○雪野　○松野　○千代野　○三好
◎鶴野

新盛樓

明治樓

◎福松　○松吉　○玉春　○淺野
○小糸　○君代　○菊江　○小秀
○東　○松子　○界　○小泉
○君春　○明治　○鶴松　○綠

旺亭

○君鶴　○菊野　○正雄　○小春
○吉野　○幸　○花鳥　○玉葉
○鶴子　○若駒　○初菊

大鶴樓

○花子　○若島　○操木　○千代花
○清鶴

泉屋

◎種吉　○若葉　○小泉　○初音
○若玉　○武藏野　○忍　○薄雲

德盛樓

○數惠　○静枝　○竹菊　○福江
○松子　○小六　○愛吉　○竹子

海棠雨を帶ふるの艶姿あり、櫻花風を厭ふの嬌態あり、或は專一情郎を念ふあり、或は屈指艶信を待つあり、巨臀茶臼の如く、明治の板額此に在りと威張るあり、或は細腰糸の如く、二代の今紫は我なりと氣取るあり、或は亂暴を以て活潑と誤る者も之れ有ん、

或は沈鬱を以て着實と憶ふ者も之れ有らん、千姿萬態僂指に遑あらずと雖も、書を能くし、文を能くし、畫を能くし、花を能くし、茶を能くし、蹈を能くし、皷を能くし、琴を能くし、笛を能くし、琵琶を能くし、胡弓を能くし、裁縫を能くし、庖厨を能くし、禮儀を能くし、所謂貴人に宜しく、軍人に宜しく、學者に宜しく、措大に宜しく、農夫に宜しく、商人に宜しく、工人に宜しく、車夫に宜しく、馬丁に宜しく、老人に宜しく、少年に宜しき者に至ッては、散史未た之を聞かず、只其れ淡泊にして濃厚ならず、正直にして狡猾ならず、故に夫の手練手管を以て嫖客を軟化し、蕩化し籔弄し了ッて、畢に嫖客をして家を忘れ、身を忘れ、親を疎んし、妻を去り、子を弃つるの有頂頭家たらしむへき、妖法魔術を知らざるものゝ如し、若し強ゐて彼等か妓術の十八番と雖も稱す可きものを求めば、玉章を贈りて情郎の熱心を煽起するに在り、故に起きては書き、寢ては書

き、歩むにも書き、イむにも書き、躓いても書き、轉んでも書き、四六時間中、喫飯、流髪、入浴、睡眠の外は、全く玉章を書くの時間に充て、夥多の筆紙を費して店舗の收益を増し、巨額の郵税を拂つて政府の歳入を助け、無量の反古を作りて情郎の厠料に供へ、此を以て吾輩の效術既に了はれりとなすは最呵笑、

湯屋

衛生の要は清潔に在りとは、萬古不易の格言にして、混堂の改良亦一日も忽にす可からず、佐世保港に十三の湯屋あり、概ね當世の改良を加へ、天滿街の玉乗湯、は水質佳良を以て其名高く、之に亞ぐものは、八幡街の宮本湯、宮田街の宮田湯、部久手の立本湯、上坊の山口湯、濱田街の東京湯、濱ノ湯、東雲湯、緑湯、本島街の寶湯、矢岳の矢岳湯、琴平街の琴平湯等なり、

宅地料　借家料

港内の宅地料は、最下等の地所にして一坪に付一ヶ年金廿錢、に下らず、最上等の地所にして一坪に付一ヶ年金八拾錢に上る、故に一反歩の上等地を所有すれば、厘毛の肥料を用ゐずして一ヶ年貳百四拾圓の地料を得べく、一反歩の最下等地を所有するも、猶一ヶ年六拾圓の地料を得べし、隨つて地所の騰貴も亦非常にして、佐賀縣の豪農大河内敬氏の如き、偶然にも暫時にして巨萬の利益を得しとかや、借家料の如きも、十坪以上の家屋なれば、敷金三拾圓乃至五拾圓、一ヶ月の借家料拾圓乃至拾五圓に下らず、廿坪以上の家屋なれば、敷金百圓乃至貳百圓、一ヶ月の借家料廿圓乃至三拾圓に及ぶ、其不廉驚くに耐へたり、然れども此れは是れ一昨年以來の暴騰にして、永續すきものに非ず、地主家主たる者佐世保の繁昌を永遠に維持せんと欲せば、應に算盤を臂にし

て一考す可きの問題たり、

統計一括

凡そ萬物の需用供給を平均に保たんと欲せば、先つ統計を詳知せざる可かららず、左に佐世保港諸般の統計を示す、

船舶	四百三艘	内 日本形大船	廿五艘
		日本形小船	三百七十八艘
水車	廿六ケ所	飼牛	五百廿四頭
乘馬	三頭		
獵銃	八十六挺	内 狩獵一等免狀	一人
		全二等免狀	十八人
牛馬賣買業	九人	全三等免狀	六十七人
興行師	一人	遊藝人	一人
理髮床	三十五戸	按摩	廿六人
女髮結	六人	理髮人	五十人
		洗濯屋	五戸

蝙蝠傘張替師	二戸	提燈屋	三戸
紺屋	六戸	裁縫店	廿三戸
鼈甲細工	壹戸	銀細工	壹戸
硝子細工	壹戸	金具細工	壹戸
鉄細工	拾三戸	鉄葉細工	六戸
大工	四拾五人	木挽	四人
杣職	壹人	石工	拾六人
桶工	拾八人	左官	七人
漁業者	三拾八戸	精米所	壹戸
刀劍磨工	壹人	彫刻師	壹戸
印刻師	三戸	表具師	四戸
產婆	三人	瓦製造	拾一戸
畳製造	拾一戸	靴製造	五戸

三味線製造　壹戸
石鹸製造　壹戸
屋根板製造　壹戸
木具指物類製造　貳戸
麵包製造　壹戸
蒟蒻製造　四戸
飴製造　五戸
素麵製造　貳戸
木炭製造　壹戸
綿商　壹戸
履物商　七戸
煉化商　壹戸
セメント商　壹戸
葬具製造　一戸
白灰製造　貳戸
荷車製造　貳戸
髮附製造　壹戸
麩製造　壹戸
麹製造　七戸
餅製造　貳戸
豆腐製造　拾九戸
ラムネ製造　三戸
漆器商　二戸
荒物商　壹戸
臘商　壹戸
紙文具商　五戸

明治廿九年四月六日印行
仝　年仝月廿四日發行

版權所有

定價金參拾錢

著作兼發行者
兼版權所有者　近藤鉄
長崎縣東彼杵郡佐世保村千二百三十六番戸寄留

廣島縣平民
印刷者　境賢治
長崎縣平民
長崎市本五島町廿九番戸

賣捌書林

佐世保港八幡町　五郎川書店
仝　濱田町　樺島書店
長崎市引地町　鶴野書店
佐賀市白山町　河内壯助
久留米市米屋町　菊竹書店
熊本市新二丁目　長崎次郎
豐後大分町　山川正三郎
筑前博多　積善館支店
薩島市仲町　吉田幸兵衛
廣島市追手町　松村善助
大坂市備後町四丁目　梅原龜七
東京市日本橋區三丁目　博文館

近藤鉄著
通俗
東京開化繁昌記
板權所有出版人　東京芝區柴井町書肆　松井忠兵衛
和裝全二冊定價金貳拾錢

近藤鉄著
教科文範
板權所有出版人　東京芝區柴井町書肆　松井忠兵衛
和裝大本全三冊　上卷拾五錢　下卷拾錢

宮內省圖書取調委員山縣篤藏君題字
前代議士山田實親君序文　近藤鉄著
衛生摘要
和裝全一冊定價金拾五錢
發兌賣捌所　大坂南區久寶寺町　前川善兵衛

近藤鉄編輯
和漢修身格言集
和裝上下二編合本一冊定價拾八錢
板權所有出版人　東京橋區木挽町一丁目　萬字堂

賣捌書林

佐世保港八幡町　五郎川書店
仝　濱田町　樺島書店
長崎市引地町　鶴野書店
佐賀市白山町　河内壯助
久留米市米屋町　菊竹書店
熊本市新二丁目　長崎次郎
豐後大分町　山川正三郎
筑前博多　積善館支店
薩島市仲町　吉田幸兵衛
廣島市追手町　松村善助
大坂市備後町四丁目　梅原龜七
東京市日本橋區三丁目　博文館

近藤鉄著
通俗繪入
東京開化繁昌記
和裝全一冊定價金貳拾錢
板權所有出板人　東京芝區柴井町書肆　松井忠兵衛

近藤鉄著
教科文範
和裝大本全二冊　上卷拾五錢　下卷拾錢
板權所有出板人　東京芝區柴井町書肆　松井忠兵衛

宮内省圖書取調委員山縣篤藏君題字
前代議士堀田實穎君序文　近藤鉄著
衞生摘要
和裝全一冊定價金拾五錢
發兌賣捌所　大坂南區久寶寺町　前川善兵衞

近藤鉄編輯
和漢修身格言集
和裝上下二編合本一冊定價拾八錢
板權所有出板人　東京京橋區木挽町一丁目　萬字堂

◎解痲散　復方タルリン

本劑の痲症に特効あることは左の廣告に詳なり

慢性痲病患者諸君に告く

小生儀慢性痲病に罹り五ヶ年間種々樣々の藥を用候へとも更に寸効無く殆と困居候處日外大阪朝日新聞に廣告されたる大坂市高橋盛大堂製造の解痲散並に復方「タルリン」の兩藥を三週間用ひしに忽ち全癒に至り茲に數年の宿痾を一朝に忘るゝを得たるは偏に該藥の神妙なる鴻恩に由るものにして深く感謝に禁へす候世間痲病に惱まるゝ諸君は速に該藥を服用して拙者か言の虛ならさるを知り給へ但し近頃同名異物の藥を販賣する者あるやに聞く依て購求諸君は本舗の商標兎印を認めて御求あれ

佐賀縣小城郡小城町

中野助勝

◎ 寶丹

近來各縣下に於て販賣する寶丹其數少からす隨つて外形の体裁は東京市池之端守田製の寶丹に似たるか故に購求者に於ても迷惑せらるるならんと思量し弊店今般本家寶丹所なる東京下谷區池之端廿七番所有地守田治兵衛氏と特約を結ひ專ら卸小賣に勉強仕候

佐世保軍港濱田町

荒木榮盛堂分店

流船荷客廻漕問屋

尼崎流船元扱所

佐世保軍港

肥前屋事

佐世保鎮守府運搬御用達

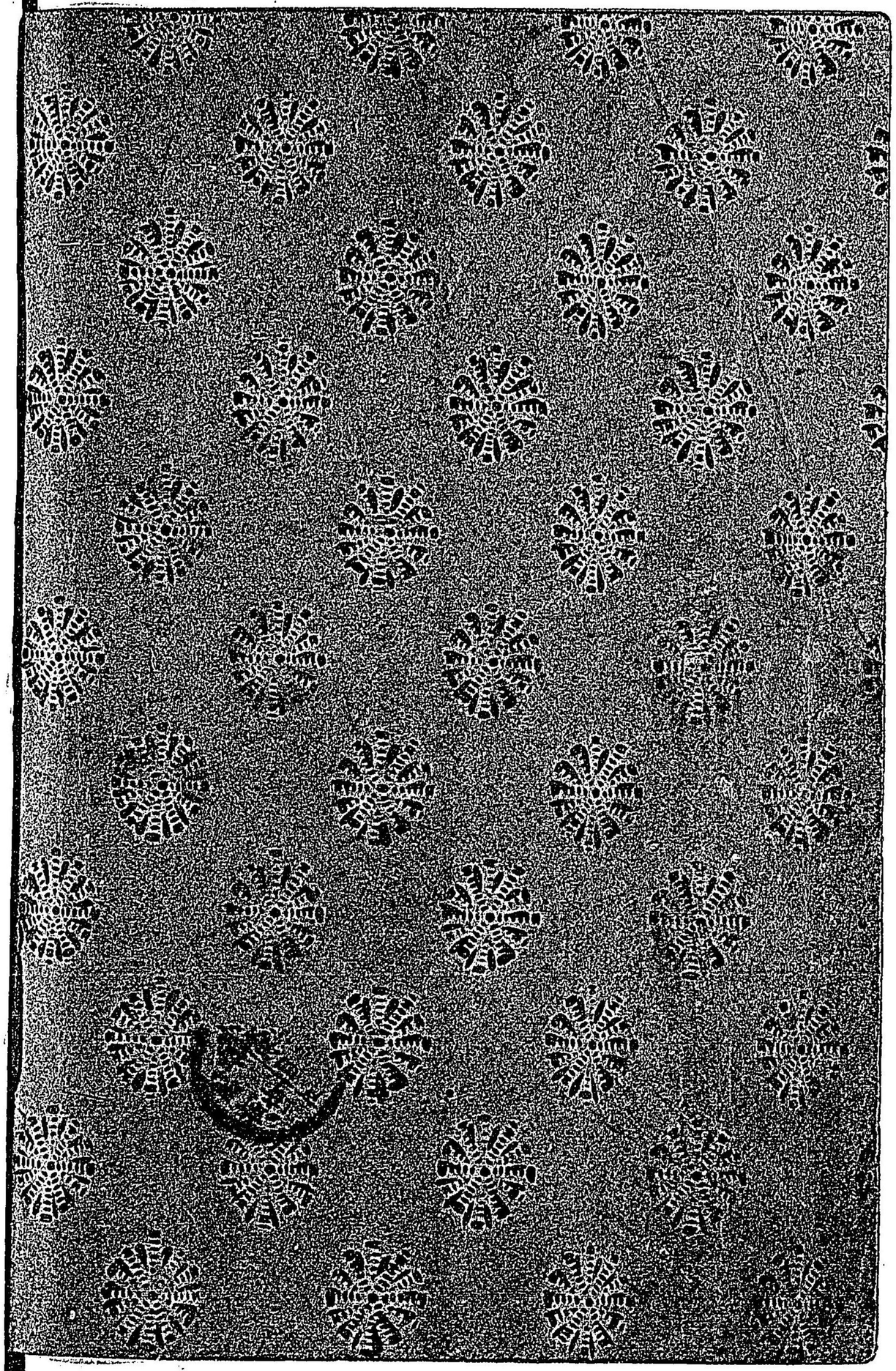
岩永回漕店

頁	行	誤	正
一	三	抽	柚
四	九	摸	模
五	四	馬	局
七	二	山	島
八	一	伊呂波	色葉
十	五	藏	嬉
廿三	五	稔字下	脫氏字
卅一	三	る	り
卅二	六	紙	誌
六二	十一	倒	側
六五	八	巍	巍
七三	十	旺	鵬
八二	五	奸	軒

◎和洋古着新物
小袖蒲團類販賣所
佐世保軍港濱田町名切口
仝　川　尻本店
本　町
川　尻支店

頁	行	誤	正
一	三	抽	柚
四	九	摸	模
五	四	焉	局
七	二	山	島
八	一	島	黒
十	五	波	葉
廿三	五	藏	嬉
廿一	三	下	字
廿二	六	紙	り
六	十一	倒	側
六		魏	峨
七	八	旺	鵬
八	十五	奸	軒

和洋古着新物
小袖蒲團類販賣所
佐世保軍港濱田町名切口
全　本　町
川尻本店
川尻支店



特 72
33

301575-001-5

特72-33

佐世保繁昌記

近藤 鉄／著

M29. 4

ADB-0001

以て粋士の參考に供す、

金壹圓貳拾錢　（娼妓一人　佳肴數種　美酒双瓶）

金壹圓七拾錢　（藝妓兼娼妓一人　佳肴數種　美酒双瓶）

客若し酒肴を欲せざれば、菓子なり、茶碗蒸なり、鮓なり、飯なり、各其欲する所の一を擇ひて命するを得可し、凡ろ建築規模の大小、閣室裝飾の美惡、待遇の冷熱、閨情の厚薄等は、各樓各異、各妓各別なりと雖も、各樓概して定額以外の散財を強ゐず、只管淡泊にして邪氣なるは、蓋し天下無比と稱す可し、人若し散史か言を疑ばゞ論より證據、一夕の行脚を試みて可なり、

登樓の費は必す前收するを例とす、故に囊中無一物にして登樓し、翌朝馬に騎して還るとか、行燈部屋に籠城して、猷娼の差入を頂戴するとかの彌次喜太を演するとは、遺憾ながら此廓に望む

べらす、

甲君「小佐世保の女郎か耳に聞いて愉快に感するは何であろ乙大砲の音サ　甲イクラ軍港の猫たッて眞逆大砲の音を快愉とも せよい　乙君も合點の惡い男だ　子福神は軍艦に在りッ軍艦か來れば大砲か鳴るサ　君解ッたか　甲成程　甲君小佐世保で一番もてる客は何であろ　乙軍人サ　甲ソレカラ　乙軍人サ　甲ソレカラ　乙請負人サ　甲ソレカラ　乙町人サ　甲違ふ〳〵　乙何だ　甲寫眞師よ　乙フン濡手握粟の寫眞師かい　寫眞師は女郎を好きゝ女郎は寫眞師を好きゝ好いた同志の差向　いイヤ違ッた　好いた同志の共稼かイヤ又違ッた取りたい同志の取ッたり取られたりか　甲酒落てる、此れは是れ素見客中問答の一節にして粋士の參考と爲る可き奇話なり、

廓内の妓に三種あり一を娼妓と云ひ二を藝妓兼娼妓と云ひ三

三味線製造　壹戸
石鹸製造　壹戸
屋根板製造　壹戸
木具指物類製造　貳戸
麵包製造　壹戸
蒟蒻製造　四戸
飴製造　五戸
素麵製造　貳戸
木炭製造　壹戸
綿商　壹戸
履物商　七戸
煉化商　壹戸
セメント商　壹戸

葬具製造　一戸
白灰製造　貳戸
荷車製造　貳戸
髮附製造　壹戸
麩製造　壹戸
麹製造　七戸
餅製造　貳戸
豆腐製造　拾九戸
ラムネ製造　三戸
漆器商　二戸
荒物商　壹戸
臘商　壹戸
紙文具商　五戸

明治廿九年四月六日印行
仝　年仝月廿四日發行

定價金參拾錢

廣島縣平民
著作兼發行者
兼版權所有者　近藤鉄
長崎縣東彼杵郡佐世保村
千二百三十六番戸寄留

長崎縣平民
印刷者　境賢治
長崎市本五島町廿九番戸

版權所有

寶丹

近來各縣下に於て販賣する寶丹其數少からず隨つて外形の体裁は東京市池之端守田製の寶丹に似たるか故に購求者に於て迷惑せらるるならんと思量し弊店今般本家賣閣所なる東京下谷區池之端廿七番所有地守田治兵衛氏と特約を結ひ專ら卸小賣に勉強仕候

佐世保軍港濱田町

荒木榮盛堂分店

流船荷客廻漕問屋

尼崎流船元扱所

佐世保軍港

肥前屋事

佐世保鎮守府運搬御用達

岩永回漕店